悪童物語

22 ドロップ

足立巻一
え・津高和一

ぼくたちは「悪童」ではなかった。
しかし「善童」でもなかった。

前号まで 父は二六新報という新聞の同人であったが、ぼくの生後四カ月で急死。母は実家に帰り、祖父母に育てられる。小学一年生のとき、祖母も死に、祖父につれられて故郷長崎に引きあげたが、その祖父も急死し、孤児となる。親戚の寺や染物屋で養われていたが、急に神戸の母の実家へ引き取られ、そこから諏訪山小学校へ通うことになった。同級のトオルさんと友達になり、絵を描いたり、タルマッチをしたりして、毎日毎日遊んだ。中でも生田神社の森やおまつりは僕達の好奇心をあおりたてた。また、阪妻に魅せられて場末の映画館をまわったり、覆面遊びをしたりしたのもこの頃である。

ぼくたち大正末年代のこどもには、さまざまな遊びが歳時記のように季節に従って移っていった。

正月といえば、タコあげとハゴイタとにきまっているように思われがちだが、ぼくたちにはタコあげの記憶はない。ハゴイタのほうは女の子のそれを取りあげて遊んだことがあるが、正月にはもっぱらドンパン、パチパチという爆竹遊びにふけった。それも新開の海港都市らしい風俗であったといえるだろう。

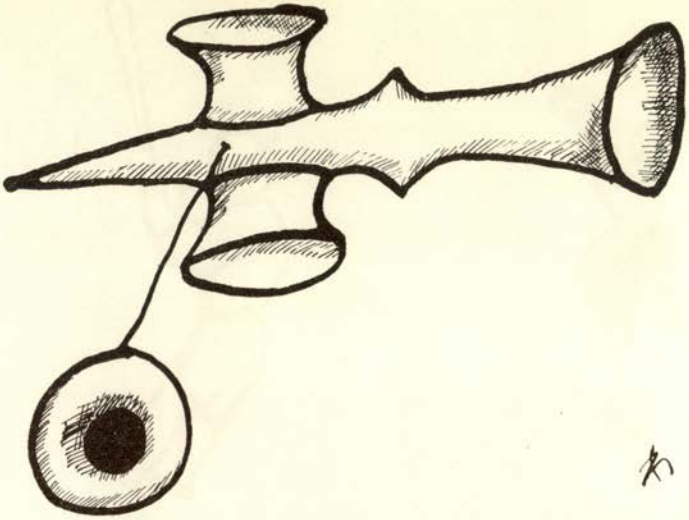
玉入れ。
ドン。
チャンゲリ。
ベッタン。
ラムネ。
バイ。

そんないろんな遊びがあった。

玉入れというのは、木製の手遊びのオモチャである。柄の三方に玉を受けるちいさな皿がついており、一方はヤリのようにとがっている。柄をもってあやつり、三つの皿に木の玉をつぎつぎに受けては、ヤリで玉にうがたれた穴を刺す。それをくりかえす。途中、玉を落としたり、刺しそこなったりすると失格だ。

玉入れは生田神社の春祭りとともに流行を始めたように思う。祭りの夜店で売っていたからだが、ぼくたちはその柄を短くしたり、玉の穴をガラスの破片で大きくしたり、着色してニスを塗ったり、いろいろに改造して遊んだ。ぼくは玉入れがうまいだけでなく、玉を緑色に着色して得意であった。正式には日月ボールという。

ドンというのは、一種のカード遊びである。細長いカードに、原色で少将から元帥までの軍人、水雷艇、巡洋鑑などの軍鑑、地雷、タンク、飛行機などが印刷してある。そのカードを持って走りまわり、「ドン！」とぶつかり、ふところからカードを出して見せあう。だから、ドンである。少尉は大尉に負け、中将は大将に負け、巡洋鑑は水雷艇に負け、戦車は地雷に負ける。飛行機が一



羽のついたちいさな円盤はのちにオジャミにかわり、これはゲタをはいてやらないとうまくいかない。チャンゲリの日本化であったのだろうか。

ベッタンはメンコのことで、ぼくのもっとも愛好して得意とするところである。東京、長崎ではメンコといい、カードにも大小さまざまあり、丸いのもあって石畳のうえで戦わせ、相手のメンコを裏返せば勝ちであったが、神戸のベッタンは変わっていた。

ゴミ箱のフタを裏返し、そのうえにこどもたちは等数のメンコを出しあってならべ、テンギと称するカードでそれをゴミ箱に落とす。テンギには油をぬったり、角をロウで固めたりし、それをあふるように打ったり、角でハネ飛ばしたりする。落とされたカードが二枚重ねればニッチンであって、地上のカードはその子のものになる。三枚かさなればサッチンだが、ニッチンでなければ勝ちにならない。ぼくはベッタンをボール箱いっぱいに集めて優越感に酔っていたものだが、こんなメンコ遊びの仕方は全国でもめずらしいのではないかと思う。ただ裏返しては取るというだけの単純な遊びではないのである。この仕方はどこから始まったのだろうかと、いまでもふしぎである。遊戯研究家のお教えをいただきたいものだ。

ラムネは、ラムネ玉遊びだが、これもラムネ玉をただ打ちあわせて、あてたほうが勝ちという単純なものではない。たいてい露路のおくの塀を背景にし、そこに区画をつけてそこに順番で投げこみ、玉を一発であてればそっくりもらえるという方式である。ラムネ玉のことを東京でも長崎でもビー玉と呼んで、やはりこどもの遊びに利用されていたが、ラムネとはまことに即物的な名称である。また、ビー玉を土にころがしてただあてるというだけでないというのもふしぎである。神戸には歴史を持つ土俗の遊びがないので、そういう手のこんだ変種を生んだのであろうか。

バイはちいさな鉄のコマである。ゴミ箱のフタをはず番強いが、それも軍人には勝てない。勝ったほうが相手のカードを取りあげ、カードをたくさん集めた子が優勝である。

チャンゲリは、中国人の遊戯がこどもたちの世界にはいってきたのだろう。羽のついたちいさな円盤を足の土ふまずのところで蹴あげ、落ちてくるとまた蹴あげ、長くつづけたものが勝ちである。ぼくはチャンゲリの妙手で、二百回以上も蹴りつづけた記録を持ち、いまでも人に負けない自信がある。

し、そのうえにゴザを乗せて中央をくぼませ、バイを舞わせる。すると、つぎの少年はバイを回転させながらぶっつけ、ハネとばされたほうが負けである。ぼくたちはバイにヤスリでギザギザをつけ、相手のバイをはじきとばす工夫をこらしたりした。バイとは貝(ばい)——巻き貝に似たコマという意味だろう。

こうした遊びが、こどもたちの日常を川のように流れた。その流行には天体の運行のような、あるいは自然の摂理のような正確な流れがあった。ぼくはベッタンがと

りわけ好きであったが、一年中というわけにはいかないのだ。だれが司るというわけではないのに、遊びにはそれぞれ時期があり、早くベッタンがはやらないかなあ、と思っても、だれも相手にしてくれない。そして、時期が来ると、こどもというこどもはベッタンにふけり、またいつしかラムネがとってかわる。

ぼくにはそれが大変くやしかった。しかし、ひとりふたりとベッタンを手にしなくなり、やがては、いくら誘ってもたれも応じなくなり、ボール箱いっぱいためたベッタンも紙くずに変わっていく。きのうまで紙幣のように、あるいは黄金のように光りと権威とに輝いていたものが、たちどころにニセ金のようにうすぎたなくなるのだ。来年まで持っていればまた生命を取り戻すことはわかっていても、ぼくたちはいさぎよく捨てた。

ぼくたちの遊び場は、トオルさんの家がある生田神社の東側の露路であった。ベッタンやバイに必要なゴミ箱があり、人通りもなかったからである。そうして、ぼくたちの時は刻まれ、バイが流行すると正月が来るのであった。

トオルさんはそのころ子もりをしていて、ぼくたちの遊びにもほとんど加わらなかったが、後年、こどもたちの遊ぶバイの音が冴えて露路に日ぐれが深まる、というような短歌をものにしたことがある。

年中行事に似た遊びとは別に、不意に、あるいは常時おこなわれる遊びもあった。

チャンバラや森での冒険などがそうであったが、生田さんの東門筋がはじめてアスファルトで舗装されたときには、こどもたちはローラー・スケートにふけった。といっても、ゲタの歯に戸などに使う車を打ちつけ、それをはいて三角帳場のほうからすべるのである。そのころは、せいぜい自転車か通行の人たちに気をつければよく格好のスケート場であった。

常時流行していたのは野球である。グラウンドには生

田神社の正門の鳥居をくぐった境内が選ばれた。

そのうち、ぼくはドロップの投球をおぼえた。軟式のボールを親指と人さし指とで輪を作るように握り、肩から回転させながら投げる。すると、ボールはバッター・ボックスで急角度に落ちる。もっとも、ドロップ以外はダメだ。直球を投げてはスピードがなく、カーブはどうにもまがらなかったが、このドロップに少年たちはたやすく引っかかり、三振する。

ぼくは近所のチームのピッチャーになり、近くのこどもチームと境内で試合をしたが、全球ドロップを投げてしきりに勝った。ひどく気をよくした。

ぼくは長崎から神戸に移って来たはじめ、諏訪山小学校のガキ大将から「きょう、野球の試合するから出エ」といわれたことがある。新入早々のことで、よほど野球がうまいと誤解されたのだろう。ところが、長崎ではボールを握ったことも、グラブをはめたこともなかった。それで、守ってはウロウロし、返球もできず、打っては三振の連続で笑われどおしであった。ところで、最終回近く、どうしたはずみか、打席に立つとバットにボールがあたった。打球のゆくえは見えない。

「走れ！もっと走れ！ホームランや！」

そんなケシかける声がぼくに集中し、わけもわからず走ったことがあるが、そのときガキ大将は、みんなと「まぐれあたりや」と笑った。その声はぼくに根深い屈辱の想念を植えた。

それで、野球なんか二度とするまいと思っていたのに学年が進むとボールを握るようになり、ついにドロップの会得に成功したのである。

ところが、北野小学校のチームと試合をしたとき、相手のピッチャーは同じ小学生というのに中学のようにカラが大きく、すごいスピード・ボールを投げる。ぼくたちは三振の連続である。しかも、やつは打ってはホームランばかりで、ぼくのドロップもまったく無力だ。

試合が終わったとき、そのピッチャーは鼻で笑うようにいった。

「あんなスピードのないドロップなんか、ねらい打ちしたらしまいや」

こたえた。

そのとき、味わったものは異端の非力とかなしみとであったかもしれない。

＜つづく＞

★関西の情報総合雑誌★

オール関西

7月号 190円

書店発売中

表紙／石阪春生

特集／不動産を考える
鎌倉 昇，水谷頴介

好 胤 対 話
高田好胤—左藤大阪府知事

邦光史郎関西を語る

関 西 の 話 題
木村重信，西岡信義，伊藤邦輔

グループ登場
大阪フィルハーモニー交響楽団

創作／眉村 卓
「異端の秋」

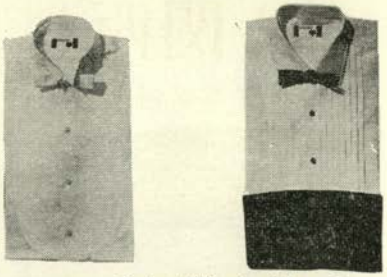
特派員報告—山口ヒロシ
ハワイ・サンフランシスコ

ハイセンスの紳士服で最高のおしゃれを！

三恵洋服店

元町4丁目　TEL ㉞ 7290

KOBE SHIRT



よろずの襯衣縫上處

神戸シャツ

神戸店－神戸大丸前　33-2168
東京店－東急日本橋店1階　211-0511 内線219
東急渋谷本店6階　462-3433

Mr. Kent
came to Kobe
流行に左右されない
本来のオシャレ
それがKentです
シックな
スコッチ風の店舗
それがFunakiyaです

オシャレ洋品の店

フナキヤ

元町3　TEL〈33〉3617

高級紳士服専門店

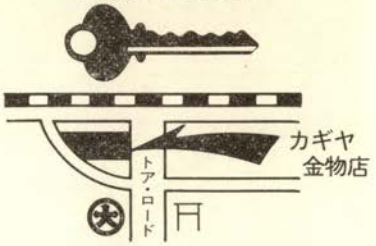
神戸テーラー

さんちかメンズタウン　TEL ㊴0388
生田区北長狭通2（阪急西口）　TEL ㉝2817・3173

舶来雑貨 サノヘ

元 町 店　元町2丁目　TEL 33－4707～8
そごう店　特選サロン サノヘコーナー

■インテリヤデコレーション
合鍵と錠前



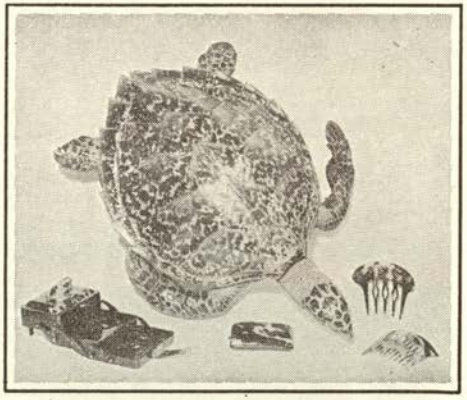
カギ屋金物店

KOBE　三宮・トア・ロード ㉝ 0193・6507
OSAKA　心斎橋そごう地下一階

創作ハンドバッグ
工芸品 ORIGINAL

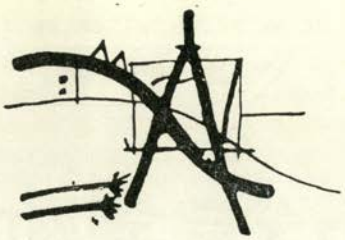
神戸■元町
ACCESSORIES
イクシマヤ

TEL.　(33) 2415・2416



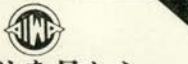
センスあふれる
べっ甲専門店
太田鼈甲店
元町1丁目　TEL㉝6195

額縁絵画・洋画材料
室内工芸品



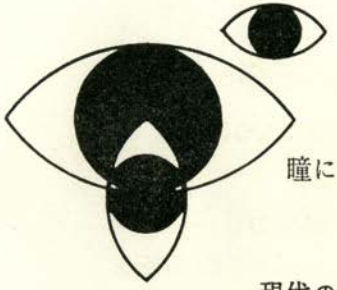
末積製額
三宮・大丸北
トア・ロード
㊗1309・6234

アクセサリーの店
モザ
神戸大丸前
TEL(39)9719

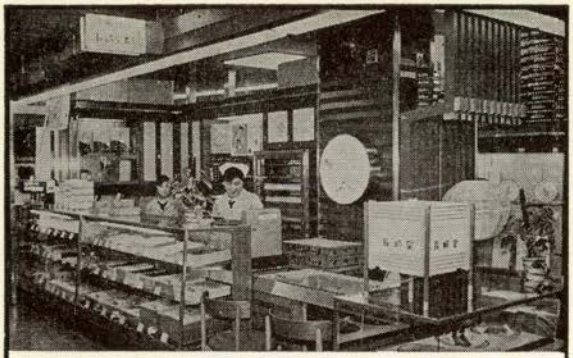


羽アリを見たら
危険信号

白アリ
一回全滅　十年間責任保証
兵庫県環境衛生事業協会理事
日本白アリ対策協会認定防除施工士
神戸商工会議所会員
アイワ消毒株式会社
神戸市生田区中山手通3～52
トアロード筋
TEL (39)8636 (33)0854



瞳に美しさを保つ
スポーツに
美容に
現代の科学が生んだ
コンタクトレンズ
日本コンタクトレンズ協会会員
国際コンタクトレンズ研究所
神戸市葺合区御幸通八丁目九ノ一（三宮駅前）
神戸国際会館内　TEL (22) 8161・(23) 2570



ご贈答に風味豊かなカステーラ

長崎堂本店

本　　店＝大橋町5大五ビル (61) 0553－4
新開地店＝松　竹　座　前 (56) 2423
元町店＝元　　町　6 (34) 4130
さんちかスイーツタウン (39) 3625

The Cosmopolitan
Valentine F. Morozoff

コスモポリタン
チョコレート・キャンデー

神戸本社	神戸市生田区三宮町1丁目170	電話 33－5304
神戸直売店	神戸市生田区三宮町1丁目	電話 33－1217
大阪堺筋店	大阪市東区淡路町2丁目	電話231－6979
大阪心斎橋店	大阪市南区安堂寺橋通4丁目	電話251－4182
東京銀座店	東京都中央区銀座8丁目	電話571－2303
東京新宿店	東京都新宿区角筈1丁目 新宿ステーションビル地下2階	電話352－2436
東京有楽ビル店	東京都有楽町　有楽ビル	電話213－2821
東京国際ビル店	東京都丸ノ内　国際ビル	電話212－3746

創業明治二十五年

履物の山下

古い老舗に新しいセンス

神戸　　三宮センター街
TEL ㊴ 0256
確実正札　　完全冷暖房
静かに品選びの出来る店

大　上　鞄　店

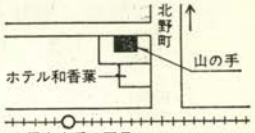
元町通1丁目　TEL 33・3962
さんちかメンズタウン　TEL 39・4627

おすし
てんぷら
榮彌

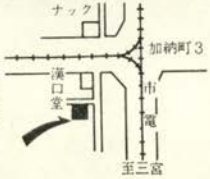
本店　大丸前・三宮神社東
TEL ㉝ 5772
5674
（毎週水曜日休み）
支店　さんちか味ののれん街
TEL ㊴ 5233

営業時間
A.M.11.30～P.M.9.

SNACK
YAMANOTE
神戸市生田区中山手1丁目
ソネビル TEL 22—3637

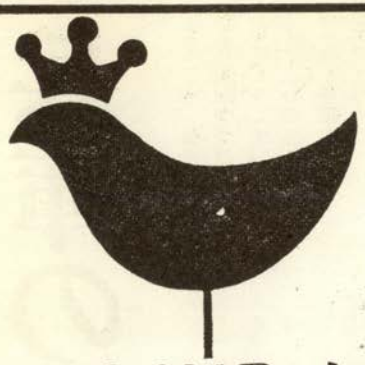


JAZZ BOX
Candy
神戸市生田区加納町3丁目2
TEL 33—3371



神戸っ子のみんなに愛される落ちついた喫茶店

TEA ROOM ai 喫茶 愛
★神戸・元町本通元一ビル2階　TEL (32) 0958



CLUB 小万

生田新道相互タクシー上る

PHONE： 39——0638
39——4386

グラムール

生田筋・岸ビル地階　TEL 33－4637

スタンド

丘

三宮全但会館東側　TEL ㊴ 3702

スタンド 千里

東門筋東神ビル地階
TEL 33－4730

連載小説第四十一回

兵庫の女

武田繁太郎
え・青木一夫

★あらすじ　まつをは十五才で広島の生家を出て鐘紡の女工になり同じ職場の安福利市と結婚。共稼ぎで苦労したすえ、呉服屋かたぢ屋を開いた。結婚後二十年やっと子宝に恵まれた。利市は「南栄商店連合会々長」に選ばれたが多忙な身は病を起こし、翌年三月他界した。亡夫の一周忌をすますと、まつをは大活躍をはじめるが、昭和六年の正月、高血圧で倒れた。奇蹟的に助かった彼女は半身不随になりながらも、呉服屋を閉じ、貸家業をはじめ、儲けた金を軍需工場に投資し、成功する。一方、一人息子の良治は京都の大学の文科に進んだ。時勢はきびしい戦時体制に入り、卒業後は思慕する川本節子を残して入隊していった。
昭和二十年の三月神戸に空襲の噂がたったが、まつをは信じようとしなかった。しかし、数時間後、まつをは空襲の真っ只中にいた。不自由な身体で必死に戦火から逃がれようとするが、ついにまつをは、おたかに良治のことを頼み力つきる。

そのころ、良治は、もう二年あまりも、中支の奥地を転々と戦いつづけていた。

母はどうしているだろう。川本節子は無事でいるだろうか。戦いのまにまに、良治は、遠い故郷にのこしてきたふたりを偲んだ。

逢いたかった。ひと目でも、顔がみたかった。生きているかぎり、いつかはきっと逢える日がやってくる。そう信じることだけが、戦いに疲れはてた良治の心の支えになっていた。明日の戦いにもまた生きぬいていこうという勇気を与えてくれていた。

僻地の戦場にいては、日本内地の様子はかいもくわからなかったが、良治が、神戸の空襲の噂をはじめて耳にしたのは、ながかった戦争がようやく終りを告げた直後、良治らの部隊が内地へ復員すべく、上海の収容所に集結したときであった。

噂をきいてみると、アメリカ軍の空襲で、内地の惨状は良治らの想像を絶しているようであって。めぼしい都市はほとんど潰滅してしまったという。むろん、六大都市の神戸も例外ではありえなかった。

「神戸の被害は、どの程度なんでしょうか」

良治は、収容所で内地の事情通だという兵隊にたずねてみた。

「ああ、神戸か。あの町も、虎刈りにやられているらしい」

「虎刈り？」

「うむ。ちょうどジャッキで頭髪を虎刈りにしたみたいに焼かれているんや。まあ、全滅にちかいな」

「そうでしたか——」

良治は、とっさに、兵庫の自分の家はおそらくもう跡かたもあるまいと観念した。神戸でもっとも人家の密集した下町である。正確無比の爆襲ぶりを誇っていたというアメリカの空軍が、よもや見のがしてくれるはずはないと思われたからである。

しかし、虎刈りの空襲なら、もしかしたら山の手の北野の辺は焼け残っているかも知れない。たとえ兵庫の家は駄目だったとしても、母は北野の別宅に難をさけていたろう。あるいは、おたかの生家のある飾磨にでも疎開して、空襲からのがれているにちがいない、とも想像された。

もちろん、このときの良治には、そうした想像を裏づけるなんの手だてがあったというわけではない。

だが、なにぶん万事に抜け目のない母のことであった

運の強いひとでもあった。脳溢血で何日も危篤状態をつづけながら、さいごには奇蹟のように死神をはねかえした、たくましい生命力を持ったひとでもあった。

母はきっと生きている。三年まえに入営するとき、どこか安全な田舎へでも疎開してほしいと、自分がさいごにのこしていった言葉を、いくぶんかでも母が心にとめてくれているだろう。そんな期待もあった。

山の手の北野が空襲をまぬがれていたとすれば、川本節子もまた、ぶじに生きているだろう、いや、きっと元気でいる、と良治は胸をはずました。

ふたりは、さいごに別れたとき、ふたりともどんな苦しい目にあおうとも、この戦争に生き抜いていこうと誓いあった。その誓いを守って、良治は生き抜いてきた。

彼女もまた、かならず生きてくれている。そして、三年まえとかわらぬ元気な姿で、

「良治さん。お帰んなさい」

と、きっと彼女は目頭をうるませながら迎えてくれるだろう。

「君もぶじでよかったね。ふたりとも、三年まえの誓いをやっとはたすことができたんだね」

手をとりあってよろこぶ再会の光景が、良治の胸に浮んでくる。いや。それはもう夢でも空想でもなかった。たしかな現実の光景として、復員していく彼を待っていてくれるのである。

節子と別れるとき、自分がもし生きて還ったら、ぜひ自分の気持ちをうちあけたいと言っておいた。そのときがやってきたのである。こんどこそはっきりと意中をうちあけ、彼女を母にもひきあわせるつもりであった。

もういまの良治には、節子との結婚を母に説得できる自信があった。戦場でいくどか死地をくぐりぬけてきた彼は、満で二十六才になっていた。

良治らの部隊に待望の復員命令がでたのは、終戦の年も越した翌年の二月であった。上海からリバティ船に乗りこみ、博多港の故国帰還の第一歩を印した。三年ぶりであった。

博多発の復員列車がながい山陽道をとおって、高架線上を神戸の街にはいったとき、良治は、それまで車窓からながめてきた沿線の街々とおなじように、神戸もまたいちめんの焼け野原に化しているのを、はっきりとみせつけられた。とくに兵庫駅から和田岬辺にかけての下町一帯は、完全に瓦礫の街になっていた。バラック建ての家とも呼べぬ建物の群れが、赤茶けた焼け跡の地肌に這いつくばるようにして並んでいた。上海で彼が予想していたとおりであった。

神戸駅で復員列車を捨てると、良治は、市電に乗りかえて山の手の北野町をめざした。市電が中山手一丁目についたとき、良治は、思わずほっと安堵の息をもらしていた。

北野は焼け残っていた。彼の家も、そして、川本節子の家のあるあたりも、戦災からまぬがれていたようであった。

良治は、肩に食いこむ重い雑嚢をゆすりあげながら、

山手の坂道をいっ気にのぼっていった。そして、三年ぶりにみるぶじなわが家の門のまえに立った。

彼は、安福寓と自分の姓をしるしてある古びた標札をちらと仰いでから、はやる胸のうちをおさえて、玄関の戸をひらいた。

「ただいま」

良治は、玄関の土間に立ったまま、ひっそりとした奥の間をのぞきこむようにして声をかけた。

その声に、すぐ奥の間からおたかがとびだしてきたが、別人のようにやつれはてた顔で、良治の姿をひと目みるなり、

「まあ、坊。ようお帰りで。お待ちしてましたんやで、坊のお帰りを」

と、とりすがるように言った。

「お母さんは？」

良治はせきこむようにたずねた。

だが、おたかはこたえなかった。きゅうに喉の奥をえずくように鳴らすと、立ちはだかったまま、両手で顔をおおって、骨ばった肩をふるわしながら嗚咽しだした。

良治も、声をのんだ。それまで張りつめていた全身のちからが、ふいに、足さきから萎えしぼんでいった。

信じられなかった。あの母がむざむざと生命をおとそうはずがない。嘘ではないのか。夢のなかの話ではないのか。母の死が、現実のものとして、まだどうしてもうべなえなかった。ほんとうに、母は死んだのか。

「おたかさん。くわしくきかしてくれないか。お母さんの最期の様子を」

茶の間にはいり、母が愛用していた長火鉢のまえに坐わっても、良治は、まだ母の死が納得できない面持ちで言った。

おたかは、あのとき、まつをと八幡神社へ避難しようとして、燃えさかる火のなかを、御崎湯のまえまで逃げていった。そのときまでは、たしかに、まつをはまだ生きていた。

むろん、ふたりとも、もう火達磨だった。おたかも、髪の毛が焼けちぢれ、顔は火傷で脹れあがっていた。あれから一年ちかくたっているのに、どすぐろくなったおたかの顔には、まだ火傷のあとが残り、右手の薬指と小指は、火傷で皮膚がひきつれて、まがらなくなっていた。

まつをの姿も、もう正視できぬほどだったと、おたかは、声をふるわしながら、それ以上は語ろうとはしなかった。

「あの晩、わたしが、無理やりにでも、お家はんをここへお連れしてたら、あんなむごい目にあわずにすんだのにと、ほんまにくやまれてなりまへん」

おたかは自責の念にたえぬように言う。

「入営まえ、坊から、不自由な母の身を頼むと言われながら、頼み甲斐のないことをしてしもうて、坊になんと申しひらきしたらええものやら。あのとき、なんでわたしがお家はんの身代りになれなんだやろかと、そう思うともう——」

「いや。おたかさんの落度でも責任でもない。あんたはさいごまで母の面倒をみてくれたんだ。あんたを恨むどころか、あんたに心からお礼を言いたいほどだ。母かって、きっとあんたに感謝しながら死んでいったと思う」

「坊——」

おたかは、怺えていた感情がどっと堰を切ったように、また烈しくむせんだが、真赤に泣きはらした目で、良治を仰いで言った。

「お家はんは、最期にこう言われました。おたか、おまえひとりで逃げておくれ。ここでふたりとも死んでしもうたら、良治が帰ってきたら、わたしのことを、だれが良治に話してやれるんや。さあ、おまえは逃げるんや。きびしい声でなあ、わたしにそう言われましたんや。あのお家はんの声を、わたしは、いまでもよう忘れまへん。いまでも、この耳にはっきりときこえてきます」

良治は、息をひそめてきいていた。

「わたしは、こら、石にかじりついてでも、生きとらなあかんと思いました。それこそ、必死になって逃げました。どこをどう逃げたんかわからんけど、気がついたら、運河のなかにとびこんで、浮いてる材木にしがみついてました。熱風で顔があつうなったら、水のなかに顔をつけ、一晩中がんばりました。もうなんべんあかん思うたか知れまへんけど、そのたびに、お家はんの声が、わたしをはげましてくれるんですわ。おたか、がんばっておくれ。良治が帰ってくるまで、死なんで生きていておくれ——。坊。その坊が、とうとう帰ってきておくれでした」

それだけ言うと、おたかは、はじめて肩の荷をおろしたように、大きく吐息した。

＜つづく＞

★神戸の催物ごあんない★

＜音　楽＞

★名曲コンサート
7月4日（金）PM7：00　演奏／大阪フィルハーモニー交響楽団　指揮／朝比奈隆　曲目／ウェーバー作「魔弾の射手序曲」シュトラウス作「美しく青きドナウ」ベートーベン作「交響曲　運命」ほか　民音7月例会　会費¥600　於神戸国際会館

★オスカー・ピーターソン・トリオ
7月7日（月）PM6：30　曲目／「ワルツィング・ヒップ」「サテン・ドール」「サンディのブルース」「ノリーンのノクターン」ほか　入場料S＝¥1700　A＝¥1400　B＝¥1200　C＝¥900　於神戸国際会館

★HNK交響楽団——ベートーベンの夕べ
7月10日（木）PM6：30　曲目／「序曲エグモント」「交響曲第4番」「交響曲第3番（英雄）」　演奏／NHK交響楽団　指揮／岩城宏之　入場料S＝¥1800　A＝¥1600　B＝¥1400　労音7月例会　会費¥1200　於神戸国際会館

★坂本　九と歌おう
7月13日（日）PM2：00　6：30　曲目／「世界の国からこんにちは」「見上げてごらん夜の星を」「太陽はさんさん」「上を向いて歩こう」ほか　演奏／小俣尚也とドライビングメン　民音7月例会　会費¥600　於神戸国際会館

★ザ・サウンズ・オブ・ヤング・ハワイ
7月18日（金）PM6：30　出演／ハワイ・カイルア・ハイスクール合唱団　指揮／ホトケ・シゲル　バトントワラー／スーザル・カベレット　労音7月例会　会費¥650　於神戸国際会館

★巌本真理弦楽四重奏団（神戸市民劇場）
7月24日（木）PM6：30　曲目／ベートーベン作「弦楽四重奏曲　変ロ長調」ボロディン作「弦楽四重奏曲　ニ長調」ブラームス作「ピアノクィンテット　ヘ短調」　入場料A＝¥600　B＝¥400　於神戸国際会館

★サム・テーラー
8月1日（金）PM6：30　曲目／「ハーレム・ノクターン」「夕陽に赤い帆」「タラのテーマ」「9月の歌」「五木の子守唄」民音7月例会　会費¥800　於神戸国際会館

＜演　劇＞

★ハムレット——劇団四季（神戸市民劇演）
7月8日（火）PM6：15　訳／福田恒存　演出／浅利慶太　出演／平幹二郎　日下武史　影万里江ほか劇団四季　入場料A＝¥1300　B＝¥1000　C＝¥700　D＝¥500　於神戸国際会館

★握手　握手　握手！一文学座公演
7月21・22・23日　毎夕6：15　作・演出／飯沢匡　出演／金内喜久夫　荒木道子　太地喜和子　浜田晃ほか　労演7月例会　会費¥550　於神戸国際会館

愛読者サロン

★晴天に恵まれた神戸カーニバル、盛会でおめでとうございました。本当にたのしく見物させて頂きました。私は鎌倉に住む神戸の一ファンですが、毎月お送り頂く〝神戸っ子〟を大変たのしみに拝見し、年に数回は神戸に行って北野町や山本通を散策したり、六甲の夜景をたのしんだりするのを生甲斐（?）にしている者です。〝神戸っ子〟に出た場所は出来る限り行ってみるのですが、その度に思うのは「こんないい土地に住める人は日本の中でも限られた幸せ者である」ということです。

五月号ポケット・ジャーナル〝神戸新観光地図〟「誰かこの山脇氏のコースを踏破してはいかゞ?」とありますが早速、この次神戸へ行った折にはこの通りに行ってみたいと思います。もしどなたか御一緒して下さる方があったら快適なのですが……それから、いつか、他所の土地の「神戸ファンの人達の集い」として神戸の方を交えておはなしできたら素晴しいナ、とも考えております。動め先やその他で嫌な事があっても神戸の澄んだ空と、水と、山、そしてそこに住む方々の暖かい気持を思い出すと、不思議に心がなごみます。貴社の御活躍をお祈りします。

＜鎌倉・三谷佳子＞

★私は東門筋でバーテンダーをしております。神戸が初めてのお客様にあるいは神戸に住んでおられるお客様にさらに神戸の情報をと〝神戸っ子〟読ませていただいております。それも一年にもなります。

おかげ様で、話題にもなり楽しく仕事をさせていただいております。また、お客様のお話しやお顔が時々〝神戸っ子〟に載っておられることがあります。すると「ああ、あの方はお元気なんだなあ」と私自身もお客様の近況を知ることが出来、大変ありがたく思っております。

＜明石市・松本一郎＞

発行にいろいろとお世話いただいた方がた

嘉納毅六嘉治正玉井中健操一郎神戸青年会議所女金井淵正彦寛次郎弘大曽根ツ一ト都真造慧小崎尾真一郎雄朝比奈部文左衛門雄一明男一彦仁雄晃道平隆安
小岡部木忠子一明門男一彦仁雄晃道平隆夫
岡崎田木田田田滝滝竹角砂塩新白雀坂阪古後上小小小小柏
牛尾並植野　野木木岡田奈部
上榎石井井石乾砂青荒有浅
井中中村宮川川中南田路谷川部口本林藤林林泉林磯井
榎本山本通
石井
乾
砂
青
荒
有
浅
朝
安
健寛孝虎勝清　猛重義秀　昌干　喜末英秀徳芳良健
之之
一次介彦二一郎夫民孝雄渥介雄勝楽二一雄一夫平一
神戸青年会議所行山若百村宮宮松福深原畑原野南中中西直外竹津
吉口杉崎上地崎井冨水　口沢部西巻脇木島馬高
辰正二裏辰高芳惣泰専忠幸圭　一次二　太健一準和之
弘慧雄郎二雄男美吉良郎郎郎三勝弘親郎吉助一

編集後記

★エア・フランスのご好意で、二週間欧州散策をさせていただくことになりました。周囲のものが、色々気をもんでおりますが「渡る世間に鬼はない」どうなることか。まあ一人旅を楽しんで参ります。では、ボンボヤッジ！

＜小泉康夫＞

★神戸っ子99号の編集を終えて、鬼のいぬ間に、いよいよ100号。腕によりをかけて編集したいと思います。乞ご期待！

★「兵庫の女」の主人公まつをも空襲で死んでしまった。街が焼けるのは早い。人間の死ぬのも早い。大学をつぶすのも早い。破壊はすべて簡単だ。建設すること、育てること、生きることはむつかしい。私自身が疎開児童世代だからか、育てることは創ることは大好きだが、破壊は心底憎いしもったいない＜小泉美喜子＞

★須磨の昼綱は、四方をもやに囲まれた茫漠たる密雲の中での作業だ。

舟が潮に逆らう時、漁師の表情は剣しくなる。浮き世に棹をさすことが日常茶飯事となる昨今、時には激流の速さを計る必要があろう。案外潮が止まっているかも知れぬ。

紫陽花の好きな娘は、朝露に涙を流す。ただ露だけに。＜岡本邦彦＞

★文明批判はよくきかされても文化批判はあまりきかれない。文明は正義と良識の名のもと文明の所産たる現代マスコミから弾劾と批判を浴びる。しかし文明のもっとも大きな弊害はマスコミ文化の中にある。ここに一つの疑問が生まれる。救かれるべきは文化にあらずやと。

＜高田嘉彦＞

★おずおずと新芽を出したプラタナスの葉は、もう汗を拭う影を作っている。百枚の名刺が半分消えた。万博もあと九カ月。

＜宮本律子＞

神戸っ子ごあんない

★月刊神戸っ子を毎月お読みになりたい皆さま、また神戸を離れているお友達に、神戸の香りをおとどけになりたい方は、編集室あてにお申込み下さい。さっそくお送りいたします。

6カ月分　六五〇円
1年分　一三〇〇円（送料共）

◎月刊神戸っ子に紹介されている、神戸の銘店には、お客さまへのサービスとして神戸っ子がおかれています。

◎月刊神戸っ子をお買求めの時には左の本屋さんどうぞ。

コーベブックス　さんちかタウン筋
漢口堂三宮店　京町

流泉書房　センター街
文洋堂　新聞会館1階
日東館　大丸前
海文堂　元町通3丁目
宝文館　元町通5丁目
甲南堂　国鉄本山駅北口
宝盛館　阪神御影南側
小原光文堂　国鉄住吉駅北口
隆司書房　新開地本通り

◎月刊神戸っ子に広告を掲載して、お店を、また商品をご紹介なさりたい方は、月刊神戸っ子編集室へお申込みください。

◎神戸百貨店会の事務局も月刊神戸っ子編集室内にあります。

＊発行／神戸っ子NO・99
昭和44年7月1日
＊編集・発行／小泉康夫
＊発行所・神戸っ子編集室
神戸市葺合区八幡通5ノ96
K・Eビル4階
電話㉒7037・8072
頒価・100円